

ビブリオエッセー

産経新聞 令和2年(2020年)9月24日(木)

大阪市東住吉区 石橋優依 (20)

【注文の多い料理店】

宮沢賢治

2020.9.24

親はどうしても口うるさくなるもので、「こは注文の多い料理店じゃない」と返している。すると言い争いに火がつき、こてんぱんにされてゲームセットだ。

「注文の多い料理店」。初めてこの作品に出会ったのは小学5年の授業だった。クラスではちょっとした童話や小説のブームが起きるほど人気だったが、賢治の手にかかる映像を見ているような錯覚を覚えた。私は童話より科学の読み物に興味に移り、その後はライトノベルにハマり、今はなぜか硬めの文学である。

さてこの童話。二人の紳士が滑稽だ。狩りの途中、森の中で見つけた西洋料理店「山猫軒」。「決してご遠慮はありません」？

明らかに不審なのに、自分たちのいいように解釈してしまう男たち。金物類をはずし、牛乳クリームを塗って、自分たちでおいしくなっていくおかしさ。クリームはひび割れ防止のお店の気遣いだろうと都合良く解釈し、知らぬ間に追いつめられている。そのちぐはぐがやみつきになる。まるでかっぱえびせん。

今から思えば私の妄想癖はこの童話から始まったのかもしれない。猫の鳴き声を聞くと会話を想像したり、暴風の雲に魚が群れ泳いでいるように見えたりする。

なかでも「すぐたべられます。」のひとこととその後の展開が好きだ。「たべられる」は食べることができる、のではなく…。読み取り方が逆になるのはお笑いコンビ、アンジャッシュのすれ違いコントみたいだ。

お気に入りには「どんぐりと山猫」や「鳥の北斗七星」などいろいろあるが賢治の作品は笑いにも通じて、ずっと深い。その意味を考えながら何度でも読める。この妄想と現実の間にあるような世界から、きつと抜け出せなくなる。

すれ違いコントの妄想

※無断転載不可